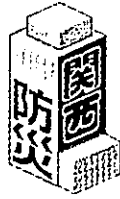


ゴールデンウィークから夏に向けての行楽シーズンが到来しました。

楽しい半面、毎年のように水の事故などが起きます。家を出発して帰ってくるまで安全に楽しむことは立派な危機管理なのです。

日帯と連日(2)をやるとうとするとき、このような生活上の変化を危険の発生と結び付けることがで



きるかどうか、ということも安全に生活する条件ではないでしょうか。

阪神大震災のあと、自助(自分の責任で自分自身が行う)、共助(周囲や地域が協力して行う)、公助(公的機関が行う)というところが大きな課題となりました。

災害が発生する前は、災害から復旧、復興する要因の割合について

て、自助が1で公助が7(共助は2)だと考えがちです。しかし、実際に災害が起これば、そうでないことに気がつきます。この比は逆転するのです。

これは災害に限ったことではありません。事故や事件でも当てはまることです。そして、安全・安心社会の実現に、とりわけ自助や共助の役割が大きいことを示して

行楽シーズンに必要な危機管理

みましょう。

災害、事故、事件が起きると、その犠牲になるのは大半が子供、女性、高齢者なのです。もちろん、その土地に不案内の外国人や観光客や各種の身体的な障害をもった人も弱者です。

まず、子供や高齢者は身体能力が成人に比べて弱く、ただけではなく、判断能力も劣りがちと考えられます。

混雑が予想されるテーマパークに1人で出かけることや、多くの人が集まる各種のイベントに1人で参加するのはとても危険なのです。これは子供どしや高齢者どうしで参加する場合も、ハイキングや山歩きも同様です。

ここでは、参加する事前の適切な判断と、とっさの場合の正しい行動が求められるからです。

が必要でしょう。

女性の場合は、できれば成人男性を同伴するとか、いざというときにすばやく行動できるようにひもつきの靴にするとか、長袖シャツやスポンにすることで少しは危険を避けることができるでしょう。

楽しさの陰に各種の危険が潜んでおり、これに翻弄(ほんごう)されてはいけません。

子供の場合、保護者が事前に判断しなければなりません。雑踏が予想されるイベントには無理して参加しないという現場での決断や、時間をずらせるという判断も大切なことです。

まして、イベントの楽しみ自体が理解できない乳幼児を連れていく場合は、保護者の参加欲望が先行していかどうかも大切な視点です。子供を中心に考えること

ないという自覚をもつことが大切でしょう。

ここで紹介した自衛策は、旅行に出かけたり、各種のイベントに参加するときの基本的な心構え、いわば常識のようなものです。何かが起こってからこれらの常識を身につけるのでは遅いのです。

(河田恵昭・関西大学社会安全学部長)